

研究部だより

令和7年1月30日発行

第6号

担当:小島

冬休みが終わり、今年度も残り2か月となりました。各学部でICTを活用した授業実践が展開されています。多くの先生方にICTを身近に感じてもらい、児童生徒の主体的な活動につなげてほしいと思います。今月の「研究部だより」は中学部1学年の授業実践紹介と研修報告です。美術の授業で、基本的な操作やルールを理解して、自分の決めたデザインを撮影し、ガラススタイルコースターを制作している様子を紹介しています。来月で今年度の研修部だよりが最終号となります。どうぞ、楽しみに！！

ICTを活用した授業実践①

中学部1学年 美術 単元名「コースターをつくろう」題材「ガラススタイルコースター」

授業者 MT:吉野先生 ST:中学部1年教員

対象生徒の様子

- ・美術の授業でiPadを活用することに期待感があり、授業中の使い方について説明するとルールどおりに使用することができた。
- ・自分で決めたデザインを撮影し、その写真どおりに再現すること並べることが目標として学習に取り組むことができた。

ICT活用の意図

- ・ICT機器(iPad)活用の場数が少なかった背景から、学習の中でICT機器を使用する際の基本的な決まり事(ルール)が守れるかを確認するため。
- ・撮影→表示→送信の基本的操作を身に付けることを目的として授業に活用した。

ICT活用の成果

- ・授業中のICT機器使用における決まり事(ルール)については、認知することができた。
- ・その後の他授業において、撮影や送信機能を活用できる場面が見られた。



研修報告

報告者 雁田 泰成

社会福祉法人侑愛会主催のもと6月21日から7回にわたって行われる「自閉症講座WEB基礎コース」を受講中です。今回は、研修報告のまとめになります。研修資料は雁田が持っています。今回載せきれなかった詳しい内容もまとめられているので興味ある方はお声掛けください。

1 取り組みの経緯

教室内を大きな声を出しながら走り回るといふ不適応行動が日常的に見られ、その行動によってほかのクラスメイトが泣き出してしたり、本児を怖がったりする様子が見られ学級内の指導が滞る場面があった。また本人にとっても将来の生活を考えたときに、不適応行動によって行動範囲や人との関わりなど社会的な制約を受けてしまう可能性があるため、今回の取り組みに至った。

2 アセスメント

1日の学校生活を観察してみると、不適応行動の発生回数が多い時間帯は登校後の準備中、給食準備中、給食後の片付け中、下校時の準備中であった。

朝の準備では、連絡帳の提出→給食セットをロッカーにしまう→ハンカチをポケットに入れる→水を飲む→教師に検温してもらう→下校方法をプレイルーム内黒板に貼る→トイレに行く→余暇活動という手順で過ごしている。

本児の席の個人ロッカーに手順書を掲示し、一人でも確認して行動できるようにしているが、登校後教室に入り、かばんを机に置いてからは黒板に貼ってある時間割を見ながら大きな声を出したり、飛び跳ねたりする行動が多く見られる。教師が「連絡帳出して」などの言葉掛けをしても1つ終わるとまた同じような不適応行動を繰り返してしまう。

給食準備時には、手洗い→エプロンを着ける→おしぼりを濡らす→座って配膳が終わるのを待つという手順。給食片付け時には、エプロンをしまう→おしぼりをしまう→歯を磨く→余暇活動という手順、下校準備時には、かばんを机に置く→連絡帳をしまう→給食セットをしまう→トイレに行く→クラスメイト全員が終えるまで待つという手順を踏むが、朝の準備同様の不適応行動が見られた。

3 分析

ASD及び本児の特性として見通しのもてない生活が苦手であること、活動の終了が分からないと集中が続かないこと、余暇時間の活動を自分で考えて行動することが苦手であることを踏まえて今回の不適応行動が頻発する場面について分析した。

朝の準備と給食後の片付けの場面では、すべての手順を終えると自分の好きなことをして余暇を過ごしてよいことになっている。余暇の活動内容に目を向けると特に目的があるわけでもなく教室内や教室横のプレイルーム内を大きな声を出して走り回ることが多かった。このことから、現段階で本時は余暇活動を楽しみにしている様子もなく教師が意図的に活動内容を設定しないと目的を持って活動することが難しいと分析できる。

下校準備時と給食準備時に目を向けると、本児がスムーズに準備を行うと3分程度で終了する手順であるが、早く終えても配膳を待つ時間やクラスメイト全員が準備し終えるまで待つという見通しのもちにくい時間が発生していた。このことから、スムーズに手順をこなしても暇な時間が発生することが不適応行動の出現につながっている。また、この曖昧な時間があることが原因で手順書に掲示してある内

を待つための指導支援が必要になってくる。

研修報告

報告者 宮崎 満智子

研修名「令和6年度胆振管内授業改善研修会」 12月11日(水)

内容

- ・小学校5年算数科の授業実践(平均の単元1回目でした:授業公開)
- ・算数科の授業改善に向けて(グループ協議)
- ・令和6年度全国学力・学習調査における算数・数学科の結果等について(説明)
- ・子どもが思考し、深い学びに向かう授業の実践(講演:岩手大学 佐藤寿仁准教授)

学びのポイント

～見方・考え方を働かせる子ども、それを鍛える教師～

学びにおいて、子どもの自走は可能なのか

大変興味深いテーマでした。「もしも、子どもの自走=与えられた教材を自分のペースで取り組むことと捉えられていたら、それは#浅い主体性ですよ。」との言葉に、思わず自分のこれまでを振り返りました。「子どもの自走だけでは自分のテリトリーで完結してしまう。教師の伴走として#見方・考え方の喚起、#問いかけや問い返し、#概念追求での自立と協働の促しをする必要がある。つまり、**子どもの活動に関わる教師の行為が鍵になる**んです。」という先生の言葉に、私の指導のブラッシュアップも必要だなあと痛切に感じました。

私たちが普段関わっている子どもたちにも、もちろん概念形成は必要なことです。主体的・対話的で深い学びの中の「深い学び」の鍵として、子どもが自ら「見方・考え方」を働かせ、そこに教師が“思考を促す問い”をするという授業。子どもの反応をどう想定しているか、子どもの学びをどう支えているかという佐藤先生からの問いに、思わず自分の授業や関わりを振り返りました。

※概念型探求のフェーズ(carla,2024、佐藤准教授が一部改変)の図を載せておきます。



今回の授業は「平均」の学習で、3つのグループフルーツから絞ったジュースの平均をどのように求めるかということがテーマでした。いろいろな言葉や操作を用いて「平均の概念形成」を図る段階で、ある男の子が「3つとも味が同じじゃないから、全部合わせて3つに分けたら味を同じにできる。」と発言したことに感動しました。数値ではないけれど、味を平均化するイメージがたったからこそ言える言葉ですよ。今回の地球岬小学校のように、学んだことをどこで使えるのか(汎化)、何が便利なのか

を伝えられるような授業を私も作りたいな～と思いました。

研修報告

報告者 中村 達也

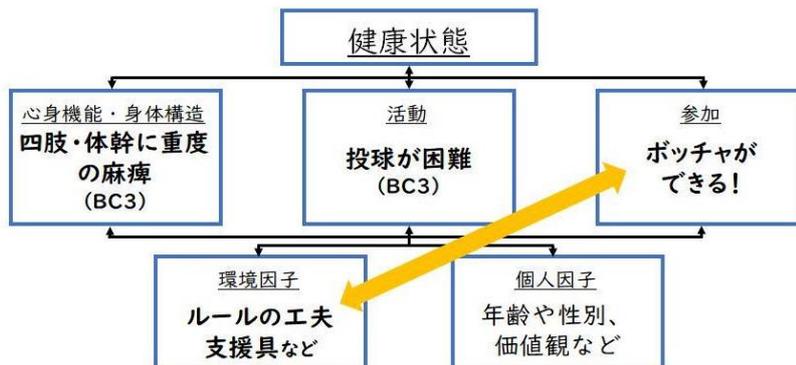
私は11月28日、11月29日に行われた第23回北海道自立活動研修会に参加しました。研修会で講師をされた上田先生は東京パラリンピックのボッチャ BC3 クラスのコーチをされたことがある東京都の特別支援学校の自立活動教諭（現在は教諭）です。ボッチャを指導する上で大切にされていることとして「**ICFの視点**」を大切に**した支援と環境設定**を行っていると話されていました。「ICF(国際生活機能分類)」とは障害の捉え方のことです。ICFでは、人間の生活機能は「心身機能・身体構造」、「活動」、「参加」の三つの要素で構成されており、それらの生活機能に支障がある状態を「障害」と捉える考え方です。そして、生活機能と障害の状態は、健康状態や環境因子等と相互に影響し合うものとされて

います。上田先生が東京パラリンピックで担当したBC3は最も障がい重いクラスで自分で投球ができない人が対象です。**投球できない人がボッチャの大会に「参加」するために、アシスタントを付くなどのルールを工夫したり、ランプなどの支援具を使ったりすること（環境因子）で自分一人ではボールを投げられない人でもボッチャという競技を行うことができるようになります。**

	クラスの説明	投球
BC1	車いす操作不可で四肢・体幹に重度の麻痺がある脳原性のみのクラス	可
BC2	上肢での車いす操作がある程度可で脳原性疾患のみのクラス	可
BC3	疾患問わず、四肢・体幹に重度の麻痺があり、選手自身での投球が困難なクラス	不可
BC4	筋ジストロフィーなど、BC1・2と同等の重度四肢機能障がいのある選手が行うクラス	可

引用：一般社団法人日本ボッチャ協会

○ボッチャの場合（ICFの視点）



この話を聞いて、授業づくりにおいてもICFの視点がとても大切だと感じました。生徒のできることやできないことから学習内容を考えるのではなく、生徒にとって意味のある学習内容であれば、どのように環境を整えると参加できるようになるのかを考えることが大切だと思いました。

研修報告

報告者 高野 久恵

研修名「第23回 北海道自立活動研修会」 11月28・29日

内容

テーマ「障がいをもつ人たちのスポーツ指導と自立活動」

～自立活動6区分の視点と自立活動教諭の役割を考える～

○教材紹介

「自立活動の指導に役立つ教材」

北海道拓北養護学校 自立活動教諭 青木 菜摘氏

発表者の青木教諭より、東京都立の前任校である知肢併置校での勤務を経験した際に作製を開始した、様々な教材の実物を紹介していただきました。児童生徒の「できた」「わかった」を共有するため、自発的に手に取りたくなるような素材や材質、色、大きさが工夫されていました。児童生徒の表情や教師とのやりとりからコミュニケーションが生まれ、認知機能や手指操作を高めることが期待できます。教材を自作する場合の部品の入手先情報や、木工、ICT等専門的な技術を持つ方の協力も得て作製していること等が紹介されました。

教材の一例

<p>○ビー玉落とし</p> <p>穴の裏側にゴムを貼って負荷を調整している。箱を木製にして落ちた時の音が響きやすくしている。</p>		
<p>○スライディングブロック</p> <p>始点と終点を理解する。目と手の協応動作を身に付ける。書字の初期学習。</p>		

○ウェイトブランケット

固有感覚が働きにくい場合、筋肉や関節の状態を認識しにくく、自分の身体がどうなっているのか気付きにくいいため姿勢が落ち着かず、気持ちも落ち着かなくなることがある。

重さのある膝掛けによって、筋肉や関節等身体の状態がフィードバックされやすくなり落ち着くことがある。



○公開セミナー

「障害のある人たちへのスポーツ指導と自立活動～自立活動6区分の視点から～」

東京都立大泉特別支援学校 教諭 上田 裕之氏

パラリンピックボッチャ日本代表チームのコーチをされている講師の講義を、会場校の拓北養護学校の職員とともに受講しました。

ボッチャの実演を通して、選手とランプオペレーター（支援者）の関わりやコミュニケーションのとり方等を参加者が体験しました。選手からの発信しか認められていないルールの中で、的確に指示を伝えること、指示を受け取ることの難しさを感じました。互いが共通理解できる表現や合図を決めておくことで競技中の意思疎通を図っていると考えられます。

自立活動6区分の視点で競技者を見た場合、トップアスリートには健康面の自己管理能力が必要であること、チームメイトや競技パートナーとの人間関係を形成するために自己理解が大切であること、障がい者スポーツでは特に感覚面の特性を考慮した環境を把握する力が重要であること、身体の動きの面では一般的に正常な動作が本人にとって最適とは限らないこと、コミュニケーション力が高い選手は競技力も高いこと等が語られました。